

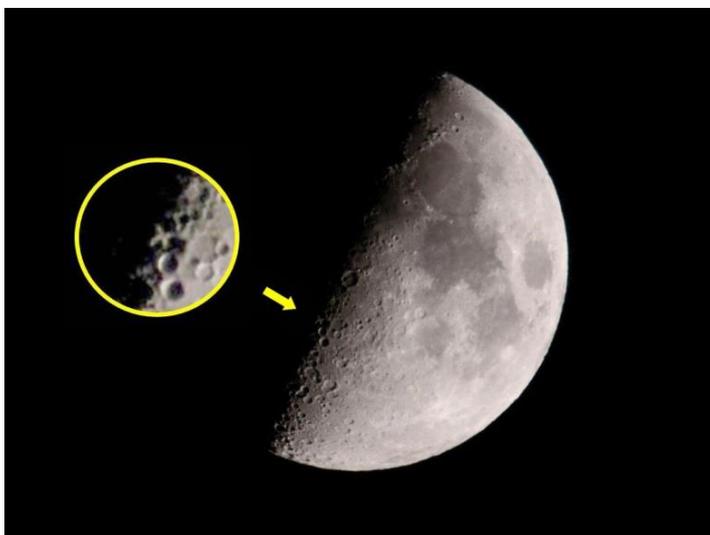
お月様の話 (1)

2020.05.03 星のお爺様

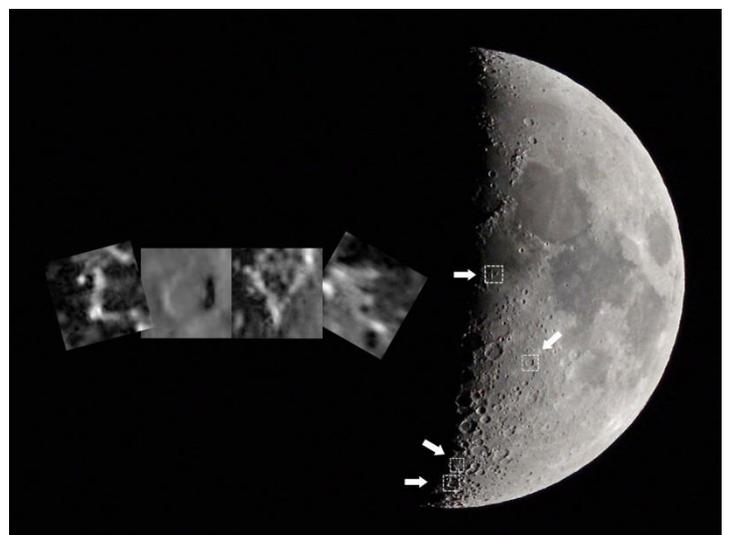
古来人々は月の満ち欠けの周期から暦を作ってきました。また、移り変わる月の形に名前を付け、さまざまな行事や風習を生活の中に取り込んでいます。これは他に類をみない日本独自の文化といえるでしょう。

	新月(朔月) 1日頃		十六の夜月 (いぎよいのつき) 既望(満月を過ぎた月)、不知夜月(一晩中出ているので夜を知らない月)とも呼ばれた。
	織月 2日頃 織維のように細い月。二日月(ふつかづき)ともいう。		立待月 17日頃 月の出を、いまか、いまか、と立って待つ。
	三日月 初月、若月、眉月などとも呼ばれる。		居待月 18日頃 居は「座る」の意味で、立って待つには長すぎるので座って月の出を待つ。
	上弦の月 7日頃 弦を張った側が上に見えることからこの名前がついた。異説: 月の上旬に出る弦月		寝待月 19日頃 臥し待ち月とも呼ばれ、横になって待たないと月が出てこない。
	十日夜の月 (とおかんやのつき) 旧暦の十月十日には「十日月」と呼ばれる行事があり、観月の慣習もあった。		更待月 (ふけまちづき) 20日頃 夜更け(午後10時頃)にならないと出てこない。
	十三夜月 古来、満月に次いで美しい月とされ、月見などの宴も行われていた。		下弦の月 23日頃 いわれは上旬の逆、古くは二十三夜講などの風習があった。
	小望月 (こもちづき) 満月(望月)前夜の月、幾月(きぼう)とも呼ばれた。幾とは「近い」の意味。		有明月 26日頃 有明ナ(夜明ナ)の空に昇る月。古くは二十六夜講などの風習があった。
	満月(望月)		三十日月 (みそかづき) 30日なので「みそか」。「晦日(つごもり)」ともいう。月が姿を見せないで「月がこもる」。

また、月面の山や谷などに地球と同じような名前を付けたり、その形に餅をつくウサギなどを連想してきました。最近では、多くの人たちが月面を望遠鏡で観察しており、文字として読める影なども見つけています。



月面に“X” 2020.02.01 19:30
我家の庭先で撮影 700mm 望遠レンズ



月面に“LOVE” 2019.02.12 20:30
我家の庭先で撮影 700mm 望遠レンズ

これらの文字は、クレーターの尾根に水平方向から太陽光が射した時に数10分間現われ、日本で見られるチャンスは数年に1度という珍しい影です。あなたのニシャルもどこかに現われるかもしれません。